

<研究ノート>

T・ヴェブレンの進化論的变化の理論

—S・エジェルのヴェブレン論を中心に—

佐々野 謙 治

1

私は目下、これまで書いてきた若干のペーパーを基にして、小著をまとめる作業に取りかかっている。この作業の過程で、エジェル (Stepheu Edgell) のヴェブレンに関する論文、つまり Thorstein Veblen's Theory of Evolutiual Chauge, (American Journal of Economic and Sociologie, July, 1975, 34, 3, pp.267—280) が、私のこれまでのヴェブレン研究に占める位置・意義がはっきりしてきた。かつて一度紹介を試みたことのあるエジェルのヴェブレンに関する上記の論文を、再度ここに取り上げて、その概要の整理を試みる所以である。以下、目下とりまとめにかかっている小著・『制度主義経済学研究序説』の目次を参考までにあげておこう。実はこの目次の附論2に相当するのが小稿なのである。

はしがき

—問題の設定

第一部 ヴェブレンはアメリカ制度学派の創設者か

I 章 ヴェブレンとアメリカ制度学派

—第二部への序章—

はじめに

一節 制度主義・「反古典」主義経済学の概念と類型

1 ゴードンの見解

2 モンターネルの見解

3 ハミルトンの見解

4 制度主義経済学の二類型

二節 進化思想の受容と制度の「変化」観

—ヘーゲルの(質的)変化観とデューイ的(量的)変化観

三節 社会改良の思想と「制度」観

—ヴェブレンは社会改良家か

おわりに

—体制を越えた制度の変化を問題にしたヴェブレン

附論1 アメリカ制度学派とドイツ歴史学派

—モンターネルの所論を中心に—

第二部 ヴェブレンとミッチェル, コモンズ

II章 制度主義者の古典派経済学批判

—アダム・スミス批判を中心に—

はじめに

一節 ヴェブレンのアダム・スミス批判の論点

- 1 進化思想の観点・科学の観点
- 2 本能・習慣論的人間観と歴史観の展開

二節 コモンズ, ミッチェルのアダム・スミス批判の論点

- 1 コモンズの集団行動と裁判所のみえる手
- 2 ミッチェルの歴史的慣習と慣行

おわりに

—みえない手(本能)からみえる手へ

III章 制度主義者の制度「変化」の理論と「制度」概念

—「企業」と「産業」概念を中心に—

はじめに

一節 ヴェブレンの資本主義「制度変化」の理論

- 1 資本主義体制・制度の分析
- 2 資本主義制度の形成・発展・変化・消滅

二節 ヴェブレンの「制度」概念とコモンズ, ミッチェル

- 1 ヴェブレンの「企業」と「産業」概念
- 2 コモンズの「資産」と「技術」概念
- 3 ヴェブレンの「制度」概念のコモンズ, ミッチェルによる否定

おわりに

—いわゆる体制変革論から体制内改革論へ

附論2 ヴェブレンの進化論的变化に関する理論

—S・エジェルのヴェブレン論を中心に—

IV章 制度主義者の景気論

—ヴェブレンとミッチェルの景気論を中心に—
はじめに

一節 ヴェブレンにおける景気変動と企業合同

- 1 近代的企業経営と景気変動
- 2 繁栄＝好況と恐慌
- 3 慢性不況と企業合同＝独占

二節 ミッチェルの景気循環論

- 1 近代的経済組織と景気分析
- 2 いわゆる景気循環論

おわりに

—体制を越えた制度の変化から体制内での経済変化

附論3 ミッチェルの生涯と業績

—今後のミッチェル研究のためにも—

むすびに代えて

—真の意味での経済学の継承とは何か

さて、ヴェブレンの「制度の変化」の分析は、単に「進化論」(進化主義)の観点からのみなされているのではなく、ヴェブレン独自の「本能・習慣論的人間観」ないし「歴史観」—この中心をなすのが「本能論」だ—と不可分の関係においてなされていることを、私は、くり返し述べてきた。すなわちヴェブレンは、「本能論」・「本能概念」を、彼の「制度の変化」分析の導きの糸としているのだ。単にそれだけではない。ヴェブレンは、一定の制度、従ってそれが構成する社会を評価する基準としても、その「本能概念」を用いているのだ。よくも悪くも、このことが、ヴェブレンの制度主義経済学をすぐれて特徴あるものとしているのである。否、ヴェブレンをヴェブレンたらしめているのが、彼の「本能論」だ、と言っても過言ではない。ヴェブレン自らが、その「本能論」を基礎に展開している彼の歴史哲学の書・『製作本能論』(The Instinct of Workmanship and the State of Industrial Arts, 1914)を、「自分の唯一の書物だ」(J. Dorfman, Thorstein Veblen and His America, 1934, p. 324を参照)と言い切っているのである。しかるにコモンズ(J. R. Commons)もミッチェル(W. C. Mitchell)も、ヴェブレンのその書を究極的には否定しているのだ。

否、彼らのみならず、「アメリカ制度学派」と呼ばれている人々のすべてが、そうなのである。

ところで、ヴェブレンの「制度の変化」の分析は、従って彼の制度主義経済学は、「進化論」と「本能論」を二大支柱にしていると言えるわけだが、ではその二つはいかに結びついているのか。言葉を換えれば、ヴェブレンは、「進化論」と「本能論」を、どう関連づけて「制度の変化」の分析を試みているのか。また、その具体的内容とはいかなるものなのか。なお、そこでは「本能」、「習慣」、「制度」という概念がいかなる関係にあり、どのような意味をもって用いられているのか。こうした問題への言及を、私は不十分ながら、これまで行ってきた。実は、こうした問題への言及を行っているのがまた、ここでその概要の整理を再び試みようとしている、エジェルのヴェブレンに関する論文、つまり Thorstein Veblen's Theory of Evolutional Change なのである。もっともエジェルは、ヴェブレンと他の「アメリカ制度学派」の人々との関係を問うという視点からヴェブレンを取り上げているわけではない。この点、私のヴェブレン研究の視点とは異なるわけだ。しかし、それはそれとして、エジェルのヴェブレンに関する上記の論文は、私のヴェブレン理解を十分に裏づけてくれるはずである。

以下、順を追ってエジェルのその論文の概要を追っていくことにするが、短い論文なので、引用箇所をいちいち明記することは割愛した。

2

ヴェブレンの社会学への貢献、とりわけ彼の進化論的变化の理論は、最も誤伝され、かつ過小に評価されてきたものに属する。ほとんどの社会学者達が、ヴェブレンを無視してきたのである。「ヴェブレンの世代のいかなる社会学者といえ、彼ほどその言葉が引用されながら、その作品が読まれなかった者はいない」(バンクス)。それには種々の理由をあげることができる。なかでも、「ヴェブレンの貢献が独立の学科としての経済学と社会学との対抗的主張の一戦場となってきた」ことが、彼の社会思想全体の再評価を遅らせる障害となった、と

エッセルは言う。「ヴェブレンは、社会学者によっては経済学者として、経済学者によっては社会学者として分類されがちであった」（マーチンデール）。はたしてヴェブレンは、「経済現象を社会現象と考え、かくして、各々の型の経済システムは社会の一特定形態である」と解したのである。とすれば、この「ヴェブレンによって始められた二つの主張を統合する」ということ、つまり経済社会学を樹立するということこそが、後の人々が追求すべき課題である、と言える。しかるに、「批判家達は、ただヴェブレンの貢献をあれこれの点から検討することに固執してきた」のみならず、「この傾向を一層押し進め、ついには経済社会学の可能性を否定した」とエッセルは言う。

要するに、エッセルによると、「ほとんどのヴェブレンの批判家達は、これまでヴェブレンがなした貢献を全体性において理解することに失敗してきた」のである。そしてまた、個々のあれこれの観点からなされた「ヴェブレンの作品解釈の間に見られる相互に矛盾する指針が、彼の全体性における貢献の独創性を認識することを遅らせてきた」のである。かくしてエッセルは、当論文の主要関心について次のように言う。「何がヴェブレンの学問の核心を成すかを問うこと、この核心は彼のマクロ社会学の中に求められるべきだということ、またこのマクロ社会学がこれまで一般に認識されることのなかった深い統一を含んでいるということ、を示唆することだ、と。

まずエッセルは、ヴェブレンがそのマクロ経済社会学を形成するにあたって影響を受けた学者として、ヘーゲルとマルクス、ペラミー、ダーウィン、そしてシュペンサーに言及する。すなわちエッセルは次のように言う。カント哲学と古典派経済学の批判をもって出発したヴェブレンは、「彼がマルクスの＜急進的ロマンテシズム＞と呼んだヘーゲルの公準を拒否した。しかし、彼の社会科学へのアプローチは、かなり唯物論的枠組に依拠している……ペラミーによってなされた私的所有制の＜愚さ＞や＜誤った方向＞や＜浪費制＞への攻撃をヴェブレンは彼の多くの作品の中で繰り返した……ダーウィンやシュペンサーの影響は、ヴェブレンの進化論的理論や志向、彼の科学研究に関する着想からして明らかだ」と。

そうした学者の観念（アイディア）にその基礎を与えられた、と言われるヴェブレン独自の全体性における貢献は、方法論に関するものを除けば、何より労働とか、所有権とか、婦人の地位とかに関する彼の論文に始まる、とエッセルは言う。1898年に、ヴェブレンが続けて執筆している三つの論文、つまり *The Instinct of Workmanship and Irksomeness of Labour*, *The Beginning of Ownership*, *The Barbarian Status of Woman*, というのがそれである。これらの諸論文は、「萌芽的な形ではあるが、ヴェブレンの重要な理論的観念の多くを含んでおり、彼の持続的な本質的関心となるであろうところのものを匂わせているのである。」エッセルがその三つのヴェブレンの初期諸論文に注目する所以だ。

エッセルによれば、それらの論文の中でヴェブレンは、「＜単に適当な諸力の衝撃を通して快苦をこうむるというのではなく、何かをなすことが……むしろ展開する行動における首尾一貫した諸性向の構成物というのが人間の特徴だ＞と考え……その人間性の隔世遺伝的局面を指し示す＜製作本能＞という用語を導入した」。そして、「この性向を、本質的に＜目的ある活動への一性向……その力によって生活や活動の無益なもののすべてが嫌悪される一つの目的ある意識＞と規定したヴェブレンは、次のように主張した。すなわち、製作本能は＜人間性の一般的特徴＞であり、＜人間生活を、人間が物的諸物を利用する場合に導く行為の一般化した規範＞であり、従ってそれは、＜経済生活過程の理論と呼ばれる資格のあるものであれば、どの科学にとっても、その出発点として役立ち、またその指導原理を提供するものにちがいない＞、と主張した。これが、ヴェブレンの生涯の研究の主要仮説であり課題なのである。これがまた、ヴェブレンが経済決定論者ないし技術決定論者であった、といわれる疑わしい批判の一つの源でもある」。

こうしてエッセルは、ヴェブレンの生涯の研究課題と、その基本視角ともいうべきものを確認するのである。すなわち、経済生活過程の理論——エッセルのいう経済社会の「進化論的变化の理論」——を構築することが、ヴェブレンの生涯の研究課題なのであり、その彼の出発点ないし指導原理が、上述の内容

をもつ「製作本能」という概念なのだ。従ってこの概念は、経済社会の進化についての分析はもちろん、その社会そのものについてのヴェブレンの評価基準ともなる重要な概念なのである。

ヴェブレンの初期諸論文は確に、後の彼の思想を見る上で見逃せない重要な論点を示されている、と言ってよい。しかし、これらの諸論文が、エッセルにとってのもつ意義は、「それらが包み有する理論のこまかな点にあるのではなく、それらが導入しているテーマであり、その論議の方法なのだ。すなわち、エッセルは次のように言う。ヴェブレンの「その各論文では、特定の経済現象は、進化論的理論と方法の助けをもって検討されているのである」と。

さて、ヴェブレンの初期諸論文での分析様式は次の仮説を含んでいる、とエッセルは言う。「生産は協同によって助長され＜製作本能＞によって動機づけられる一つの社会的活動であり、また技術の知識は累積的である、という仮説がそれだ。しかしながら、その生産の社会的性質や集団の生存の優位性にもかかわらず、＜製作本能＞の発現は、ある一つの歴史的に支配的な経済的かつ文化的な諸条件によって変化するのである。」とすれば次には、何故、いかにして、その「製作本能」の発現がある時代に支配的な経済的かつ文化的な諸条件によって変化するかということが、問われなければならないであろう。実は、この変化の過程を各歴史の段階ごとに解明——この過程の解明にヴェブレンは後に見るように「習慣」や「制度」という概念を導入する——したものが、ヴェブレンの進化論的変化の理論の内容をなすのである。

とまれ、初期諸論文でのヴェブレンは、それを二つの基本的な進化の段階において検討する。さしあたり重要なのは、平和的な条件から略奪的な条件——後者はのちにヴェブレンによって三つの段階に区別される——への推移である、というエッセルは、ヴェブレンのその推移についての説明を次のように要約する。「略奪への推移は、技術の改善の結果生じる余剰物の産出によってもたらされる。その上、この進化論的変化・推移は所有権の始まりとも相関しており、これらの諸要因の歴史的連鎖が主たる刺激となって、製作者気質を基礎とした競争を搾取を基礎とした競争へと転換させた」と。続けてエッセルは次のよう

に言う。「それに対応して略奪文化の一層の発達、社会に産業的職業と金銭的職業との区別を出現せしめたが、この区別には、搾取を名誉とし、労働を不名誉とする倫理的基準が伴っていた。（こうした状況が＜製作本能＞の発現に阻止的に作用するのだが）これらの経済的かつ文化的諸変化の含みもつ意味を、ヴェブレンは、労働とか婦人とかの社会における位置や役割と、また所有権の起源と関連づけて、各歴史の段階ごとに探求した。こうして暫定的な一般理論は明らかにされ、それが特定の経済現象の解明へ応用される」と。

ここにすでに、エッセルによると、ヴェブレンの経済社会学者としての志向はもちろん、彼の経済社会の進化に関する基本的テーマが確定されたことになる。すなわち、ヴェブレンの進化論的变化の理論は、おりおりの経済的かつ文化的条件につれて「製作本能」の発現が促進あるいは阻止されるということに注目し、そこから経済的かつ文化的状況の変化の意味を明らかにすべく、各歴史社会の進化の過程を解明していく、というのがそれである。なお、初期諸論文におけるヴェブレンは、「彼自身の方法論的論議を社会変化に関する特定の諸局面や経済的分業についての分析と関連づけて追求していく過程で、彼の後の中心的研究テーマとなるものの大半をほのめかしているのだ」。すなわち、「産業的諸活動と金銭的諸活動との利害の対立、文化的ラッグの構造的問題、有閑階級の起源やその持続的影響、好戦的文化の下での愛国心の喚起、過去の古い慣行によって与えられる既得権の合法性」、というのがそれである、とエッセルは言う。

3

こうして、ヴェブレンの初期諸論文に見てきた「マクロ社会学についての予備的概要においては、二つの関連した水準の理論が、暗黙のうちに区別されていた。すなわち、一方でのヴェブレンの一般的な進化論的理論と、他方での選ばれた諸現象に関する特定の理論とが区別されていた……後者は余りにもしばしば前者と無関係に検討されてきたが、ヴェブレンの特定理論に形を与えているのは、彼のその一般理論なのである」。かく言うエッセルは、ここに、ヴェブ

レンがマルクス経済学についてなした論議を引用する。すなわち、「＜体系のどの部分、学説のどの一論説を取り上げてみても、それは、全体の中の部分としてでなければ、また全体の出発点と統制規準とを与える先入主と仮定とに照合することなくしては、正しく理解もされなければ批判もされないし、また擁護もされない＞」というのがそれだ。続けてエッセルは言う。確かに「ヴェブレンは、たえず生産や消費や競争のような特定現象を探求したのだが、彼は、それらに関する諸理論を常に彼の進化論的变化の一般理論とのコンテキストの中で発展させた。言葉を換えれば、ヴェブレンは、理論においても実際においても、社会・経済生活の特定諸現象を孤立させて論議することを、益のない本質的に＜非科学的＞なことだとみなしたのである」と。

だとすれば、ヴェブレンの思想の正しい理解のためには、何よりその一般理論、つまり進化論的变化の理論こそ解明されなければならないことになる。かくして始めて、特定理論——エッセルのいうヴェブレンの経済現象についての解明——への正しい理解も可能となるからである。従って、これまでのエッセルの立論は、ヴェブレンのその進化論的变化の理論を見ていくための準備作業であったわけである。なおエッセルがヴェブレンの学問の核心や貢献は彼の「マクロ経済社会学」のうちにこそ探し求められるべきだと言ったのも、実は、この一般理論を指してのことであったと解することができよう。

そのヴェブレンの進化論的变化の理論は、エッセルによると、いわゆるヴェブレンの三部作と一般に呼ばれている著作、つまり *Theory of Leisure Class* (1899), *Theory of Business Enterprise* (1904), *Instinct of Workmanship* (1914) に最もよく示されている。これらの諸著作においてヴェブレンが「苦心してつくり上げたモデルは、＜本能＞、＜習慣＞、＜制度＞という概念に加えて、進化の段階についての拡大版を含んでいた」。そこでエッセルはまず、ヴェブレンの進化論的变化の理論を整序するに先立って、上記の諸概念への立ち入った検討を試みる。

その諸概念のうちでも、とりわけ本能論と進化主義への批判が強かった、とエッセルは言う。つまりこうだ。「進化主義も本能論のいずれも、ヴェブレンの思

想の真の基礎とは関係がない。というのは、人はその両方がなくてもまにあうし、それでもヴェブレンの言いたかったことのすべてを言えるからだ」(マーチンディール)。「ヴェブレンの進化の諸段階についての理論は古物博物館へ追放されてしかるべきものである」(コーサー)。また「ヴェブレンは本能と向性との区別をその相違の説明なしに示した」(ディヴィス)。だがエッセルによると、これらの批判は、ヴェブレンの思想への一つの誤解に発するものなのだ。最初の二つの解釈は、エッセルの当論文にいうヴェブレンの「理論化の二つの水準に照して見れば疑しいもの」となる。エッセルによると、これまで見てきたように、「本能論」も「進化主義」も、ヴェブレンの進化論的变化の一般理論の構築にとってはきわめて重要なのであったし、その一般理論が特定理論に形を与えているのであり、従って、この特定理論の解釈も、一般理論に照らして初めて正しくなされるものであったからだ。最後のディヴィスのそれは、明らかに誤りである。というのは、「ヴェブレンは、本能は＜意識と意図された目的への適応を含んでいる＞のに、向性的行為は非目的論的で知性によって導かれることがない、と論じているからだ」。もっとも、ヴェブレンが本能という用語を使用するのは、それに代る適切な名称がないからなのであり、またヴェブレン自身がその用語の使用に余り気のりしていない——このことは、ヴェブレンが多くの同義語、つまり遺伝的資質とか、内的に一貫した人間性向とか、性癖とか、精神的生来の特質とかを用いていることに示されている——ことも事実なのだが。

さて、「ヴェブレンは数多くの本能についてのリストをつくってはいるが、それらの多くは＜相互に補強しあう＞もので、故に、その効果においてそれらを分解することは難しいことを示唆している」。だが基本的には、それらの本能は二つの群、特に「製作本能」と「収奪・略奪本能」に還元することができるのであり、またそうすることが望ましい、とエッセルは考える。そして彼は言う。「製作者気質は＜生活目的としての有用性……技術の効率や発達＞を志向する。しかるに略奪は、＜プラグマティックな私利や私欲＞に係わりあい、＜搾取を含む＞のである」。ヴェブレンによると、「略奪も本能として類別され

るべきものであって、その本能が略奪の習慣や制度を結果として生じせしめるものである」と。

さらにエッセルは「習慣」や「制度」という概念に言及する。「ヴェブレン自らが設定した課題は、本能が＜文化的成長において効き目を現す＞やり方を探求することであった。＜すべて本能的行為の展開は習慣による修正を受ける＞という前提から出発して、ヴェブレンは、＜習慣＞や＜制度＞という用語を導入する。それは、製作本能と略奪本能が、ある一つの文化的状況において、発現を競う過程を理解するためであった。＜生活習慣＞という用語は、特定の経済的諸条件の当然の結果として生じる思考や行為の様式を示すもので、かかるものとして習慣は、本能的性向を反映もすれば、それを限定もするのである。習慣的思考や行為が確立されて長期に及ぶ類型（パターン）となると、ヴェブレンはそれを制度と呼ぶ。従って習慣も制度も、ともに文化の異なっているが関連した局面をあらわし、次には、それらは支配的な物的諸条件によって条件づけられる」。

このエッセルの言及を、ここで若干敷衍しておこう。ヴェブレンは、「本能」を動因とする人間行為が慣習化されて一定の持続性をもつようになったもの、それを「制度」と解する。故に、この「習慣」や「制度」が「本能」の発現を規定している、と言うのである。先にヴェブレンが本能の発現が経済的文化的条件の変化につれて変ることに注目していることを見たが、この変化は、習慣や制度——この総体が経済的文化的条件を規定し、一つの歴史的経済社会を構成する——の変化によって、もたらされているわけである。すなわち、収奪とか製作とかいう不変でどこにでも存在するものと解されるその「本能」のいずれを強く発現せしめるかは、各時代に支配的な歴史的に変化する「習慣」や「制度」によって規定される、とヴェブレンは考える。そして、この制度は物質的諸条件、要するに「技術」によって条件づけられている、と言うのであるから、その制度の変化は、技術の変化・発展——これはヴェブレンによれば自動的に自己目的として遂行されると解される——によってもたらされることになる。では、いかにしてか。技術の発展は新しい物質的環境をつくり出す。人間

は、この物質的環境に適應すべく、新しい習慣つまり制度を生み出す。言葉を換えれば、この新しい制度によって人間は新しい物質的環境に適應すべく努めることをよぎなくされるわけである。かくして、いずれこの新しい制度が古いものにとって代る。すなわち制度の変化が生じる。この過程がヴェブレンのいう経済社会の進化なのだ。

その進化は、旧来の制度と新しい制度の相克のうちに進展する。この点をエッセルは、次のように述べている。ヴェブレンは、制度の起源を「特定の物質的諸条件のコンテキストの中にある習慣に、そして究極的には本能に帰している」、と言えるのだが、「制度はひとたび確立されるや、それ自体の自動性を保持し発展することができるのである」。従って、「ある時代に現出した制度は、後の時代にまで残存し、その結果として生じる文化的ラグは、新しい物質的諸条件によって一般化される思考習慣と、それより以前の文化的発展の時期に一層適應していた習慣や制度との間に、＜あつれき＞を引き起こす傾向を有する。この＜あつれき＞つまり新旧の諸制度の矛盾・対立・相克を契機として、経済社会の進化が生じるのである」と。だとすればここに、エッセルの指摘を待つまでもなく、ヴェブレンの進化論的变化の理論を構築する骨組が完成された、と言えるであろう。要するに上に見てきた技術・本能・習慣・制度という諸要素の歴史的相互作用を解明することによって、ヴェブレンは、経済社会の進化を各歴史の段階ごとに説明していくのである。

4

技術・本能・習慣・制度の歴史的相互作用を、ヴェブレンは、「平和な未開時代」、「野蛮時代」、「手工業時代」、そして「機械時代」という四つの進化の段階に関連づけて検討する。こうして展開されるヴェブレンの進化論的变化の理論の中心主題——この点すでに確認済みといえるのだが——を、エッセルは次のように述べる。「ある環境は、究極的には製作本能や略奪本能に由来する思考や行為の発現にとって、他の環境よりも有利であるということだ。これら二つの本能は同時にどこまでも存在するのであるが、それらの発現と影響は、ある一

つの集団あるいは社会の物質的諸条件やそれらに特有の規定的心理的傾向に応じて変化する」と。続けてエッセルは、進化論的变化の理論の概要を積極的に整序・検討し、そして最後にヴェブレンが社会科学に対してなした独自の貢献の所在を、つきとめるのである。以下それを順に追って見ていこう。

平和な時代にあっては、「＜産業技術の状態＞が文化組織の支配的要因である。技術の水準の低さが＜戦い奪うに値する余剰＞を排除しているし、集団の生存がそれに依拠する製作者気質が、その時代の文化生活を形成する主要力として支配的なのである……集団のすべての構成員が技術的知識に＜自由に接近できる＞」ので、その発現がほとんど妨げられない。「生存への没頭が略奪を阻んでおり、そのような状況下では、製作者気質が平和な時代の集団の支配的な志向となる」。

だが技術的知識の水準の向上は、従ってそれがもたらす余剰産物は、＜平和な未開時代＞を終らせ、やがて＜略奪・野蛮時代＞をもたらす。すなわち、「＜産業の方法が、戦い奪うに値するマージンを残す程に、つまり生計をたてることに従事している人々の生存費以上のものを残す程に発達させられた場合に、初めてそうなる。従って、平和から略奪への推移は、技術的知識と道具の使用の発達に依存している＞のである」。その変化・推移は、漸進的であり、技術進歩がもたらす物質的諸条件が略奪の発展に有利となる時、この習慣や制度が、製作者気質に基づく習慣や制度にとって代り、かくしてヴェブレンのいう「野蛮時代」が現出するわけである。

こうして「ヴェブレンは、技術に動的優位性を与えているのだが、特にその反応の連鎖の当初においてはそうだ、と言えるのだが、しかしそれは、排他的にその原因となるほどに影響力をもつものではない。ヴェブレンは進化の単線的理論には同意しない」のである。エッセルが、すでに見たように、ヴェブレンを技術決定論者とみなす評価に与しない所以である。「その歴史的变化に関する複線的見地に照応して、ヴェブレンは、野蛮時代をもたらす諸力が＜どの例においても同じだということはめったにない＞ということを観察している」とエッセルは言う。何故か。ヴェブレンによれば、技術の進歩も、またそれに係

わる「＜物質的諸状況や、この状況に巻き込まれる人間素材も、若干のあるいはすべての例において全く同じことはない故に、そうなのであり、いずれの場合であれ、制度の成長を強制して特定の典型的な形態をとらせる、あるいは特定の典型的帰結に従わせるような事物の強圧的な正常なコースはない＞からだ」。

とまれ、「略奪文化の支配は余剰物の産出によって促進される。今や個人的に財産を所有することが有利となって、その結果、製作者気質は減退する。略奪や武勇に基づく新しい価値体系が、今やうすれつつある製作者の性向、つまり製作者の習慣や制度にとって代る」。この略奪文化が、ある一つの集団や社会を支配する程度は、等しく野蛮時代にあっても、種々である。特に征服に基礎を置く社会においては、その度合が強く、ここでの習慣や制度は、ヴェブレンによれば、常態以上に差別的感情を促進し、ここでの生活規律は、製作者気質の発現を強く圧する。

野蛮時代に続くのは「半平和的手工業時代」であり、その間は、「略奪文化の強圧的支配は、＜折衷的規律や所有権に具体化され、かつ緩和された自己増強のもとに＞減少する……＜手工業システムのもとでは……製作本能が再び、日常生活の規律をつくりあげる諸要素の中でも、支配的な位置につくようになって、その特徴的傾向を人間の思考習慣に与える＞ようになる」。かくして、生産が増大され、富の蓄積が加速化される。相対的に平和を享受してきたイギリスにおいて特にそうなのだが、「製作者気質の拡大とその浸透は、生産と交換の増大を、従って人口の増大を結果的に生じさせた。創造的製作者気質によって促進される生活の規律は、機械的・非人格的因果概念を引き起こし、従って特に技術に係わる科学、たとえば、物質的科学の発達に影響を及ぼす。しかしながら、技術の規模とその費用が増大するにつれて、大量の資本が生産を組織するのに要求される。と同時に、それに照応する交易の発達は、＜価格システムが前景へ出てくる＞市場関係の重要性を増大せしめることになる。こうして産業的職業と金銭的職業の間に漸進的な分離・分化が手工業時代の末期から生じる」。いわゆるヴェブレンの「産業」と「企業」の分化である。

かつて生計の資を得るために営まれていた産業・事業が、今や企業人により、

利潤つまり金銭的利益の獲得を目指して経営され始める。ここにいう産業とは、機械化された近代産業に他ならない。ヴェブレンのいう「機械時代」、つまり資本主義——企業による産業支配体制——の時代の出現である。エッセルは、この「近代産業資本主義についてのヴェブレンの研究の主たる焦点は、その矛盾にある」と言う。

機械時代にあつては、「産業生産の規模や、その組合せや費用とかは、産業を所有する人々による指導と支配にまかされる。所有者—労働者が生産過程を個人的に監督し規制していた<手工業時代>とは対照的に、<機械時代>にあつては、生産の金銭的側面が、企業人にとっての主要関心となる」。かつて手工業時代には、「訓練された個々人の技巧や創造力や応用力を基準と考えられていた産業・生産が、今や「投資に基づく利潤を目あてに組織されるようになり、貨幣を基準として計量されるようになる。有用性、つまり製作者気質の目的は利潤をあげる要求に従属させられる」。企業人は、金銭的利潤の獲得のためには、「生産のサボタージュ」つまり生産の制限も辞さない。すなわち、生産の増大が金銭的利潤の増大と結びつかなくなるや、企業人は、生産のサボタージュをもって利潤獲得とその増大に努めるようになる。それを契機に、今や、手工業時代の末期以来分化し始めていた産業と企業の間に対立・矛盾が生じる。かくして再び製作本能の発現は阻止ないし拒否されざるをえなくなる。

その生産のサボタージュをも辞さない企業人——その行為は機械時代以前の自然法哲学によって正当化される——による近代産業の運営には、ヴェブレンによると、資源の不利用、販売術、過剰生産、システムとしての生産混乱はさけられない。これがヴェブレンの近代資本主義に対する批判なのである。もっとも、かくヴェブレンが批判する資本主義とは、独占段階に至ってのそれなのだが、エッセルにはこの認識は欠落している。

とまれ、ヴェブレンのいう機械時代の体制、つまり近代産業資本主義についての批判的分析は、「さらに拡大されて、法律や政治や教育の領域にまで及ぶ」のである。エッセルは、ここに次のように言う。「ヴェブレンがなした貢献のクライマックスは、彼が企業と産業という習慣や制度間の矛盾に帰因させた機械

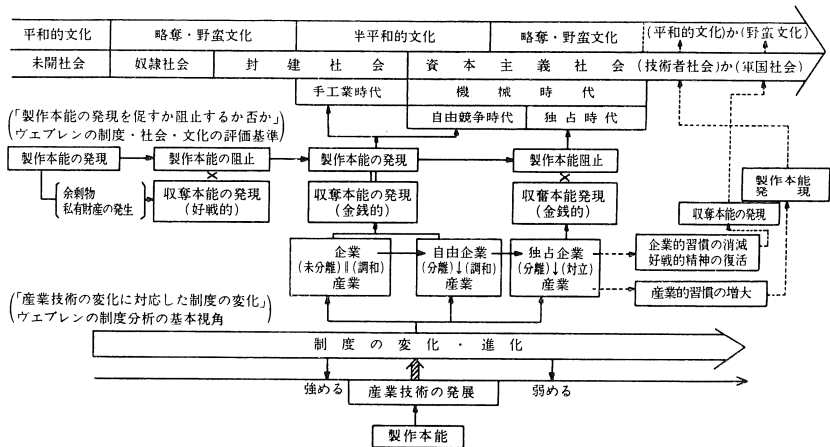
時代の製作者気質の拒否から、社会的・経済的・政治的諸分枝を理解しようとの関心にあった。ヴェブレンは、マルクス (K. Marx) やウェーバー (Mx. Weber) と並ぶ、何より近代産業資本主義に関する社会理論家である」と。

ところで、上述の矛盾をもつ近代産業資本主義を、ヴェブレンは、「浪費的で不適切、しかも究極的には移り行くもの、とみなす。それも彼は、この近代産業資本主義がその持続性に依拠している機械システムが有する侵蝕性という文化的効果を基準として、かくみなすのである。従って、「この＜営利企業衰退の理論＞も、つまりは、彼の進化論の理論や方法にその根拠を有している」とエッセルは言う。もっともヴェブレンは、正確な歴史の動向を予測することをためらった。しかし彼は、「社会主義か、国家主義的な軍国主義か、という二つの可能性」に注意を向け、企業支配の体制は、そのいずれとも両立しがたい、と言う。営利企業の体制、つまり資本主義体制は、かくしていずれ衰退しざるをえないのである。すなわちヴェブレンは、「企業の廃止よりも退位が最もありうる変化の過程である」と考えたのである。

こうして、ヴェブレンの進化論的变化の理論内容の概要を整理し検討したエッセルは、当論文を次のように結ぶのである。「この論文でのこれまでの私の関心は、次の見解を主張し、かつそれを広めることにあった。すなわち、ヴェブレンの進化論的变化の一般理論は彼が社会科学になした貢献の中心的かつ統一的局面であるという見解であり、また第二に、この理論が経済学と社会学とを統合することの相互に有利なことを立証しているという見解である。この見解が展開されてきた理由はこうだ。すなわち、ヴェブレンがなした貢献の特定の諸局面を、各々の部分に形を与えている一般理論から切り離して論議することは、一般理論と特定理論のいずれもが有する説明の価値や地位をかなり減じるし、また彼の作品の基本要素を誤って解釈させることにもなる、というのがそれである」。しかるに、そのヴェブレンの進化論的变化の一般理論はこれまで「受けるに値する注意が払われてこなかった」と。(以上, American Journal of Economics and Sociologie, July, 1975, 34, 3, pp. 267-280).

5

以上、できるだけエッセルにそくし、彼のヴェブレンについての立論を追ってきた。以下、ヴェブレンの進化論的変化の理論の基本構造を、シェーマ化して示しておこう。



このシェーマは、小稿の2, 3, 4, に見てきたエッセルのヴェブレンに関する論文の概要にできる限りそくして作成したものだが、必ずしも全面的にそうなのではない。また内容的に若干の補足も加えた。さて、2, 3, 4, に見てきたエッセルのヴェブレンに関する論文の概要を、順を追って整理すれば、以下のようになるであろう。

(a) ヴェブレンをマクロ経済社会学者と規定したエッセルは、ヴェブレンの学問が進化論的変化の理論つまり一般理論と、経済理論に関する特定理論からなることに注目し、前者が後者にその形を与えている、と解した。とすればまず、その一般理論——ヴェブレン思想の正しい理解には、何よりその全体性における検討ないし評価が不可欠だというエッセルは、ここにまた、ヴェブレンの社会科学への独自の貢献も探し求められるべきだというのであった——の

解明こそ、急務だということになるであろう。かくして初めて、ヴェブレンの特定理論も正しく解釈され評価されることになるからだ。ここにエジェルは、ヴェブレンのその進化論的变化の理論を整序し検討することを、自らの論文の主題としたのであった。

(b) その出発点をヴェブレンの初期の諸論文に求めたエジェルは、すでにそこに、進化論的变化の理論の構築がヴェブレンの生涯の研究課題として設定されていることを読みとった。同時にエジェルは、その課題を遂行する際の基本視角となるべき中心概念、つまり「製作本能」という概念をそこに剔抉し、さらに論を進めつつ、ヴェブレンの進化論的变化の理論の基本テーマをも、明らかにしていた。そのテーマとは、ある社会の経済的・文化的諸条件の変化の意味をこの変化が、「製作本能」の発現に有利か否かという点から解明ないし解釈すべく、経済社会の変化を各歴史の段階ごとに明らかにしていく、というのがそれであった。さらにエジェルは、ヴェブレンの「技術」や「習慣」や「制度」という諸概念を検討し、それらが、本能の発現を規定し経済社会の進化をもたらす要因として、ヴェブレンの進化論的变化の理論の構築にとっては不可欠の概念である、ということを指摘していた。

(c) 続けてヴェブレンの進化論的变化の理論内容の整序と検討に努めたエジェルは、ヴェブレンの主たる関心が資本主義分析、とりわけその矛盾の解明にあると言うのであった。その矛盾と関連づけたヴェブレンの手厳しい資本主義批判の論点。そして、つまるところヴェブレンが資本主義の崩壊を説くに至った点。そのいずれもが、ヴェブレンの初期の諸論文にすでに見られた分析視角や方法に由来する首尾一貫した帰結に他ならないことを、エジェルは、きわめて説得的に論述していた。

(d) なおエジェルは、資本主義に関するヴェブレンの批判的分析が、単に経済の領域のみならず、法律や政治や教育の諸領域にまで説き及ぶものであったことを指摘して、最後に次のように述べていた。すなわち、「ヴェブレンがなした貢献のクライマックスは、「企業」と「産業」という習慣ないし制度間の矛盾に帰因させた機械時代の製作者気質の拒否から、社会的・経済的・政治的

諸分析を理解しようとの関心にあった。ヴェブレンは、マルクスやウェーバーと並ぶ、何よりも近代産業資本主義に関する社会理論家である」と。

以上、(a)、(b)、(c)、(d)に見たエジェルの主張や理解を、小異にとらわれずに私のヴェブレン理解に引きつけて読み直せば、以下のように言えるであろう。

(a)「制度の変化」を解明しているヴェブレン、つまり私のいう制度主義者としてのヴェブレンの理論を整理・検討することが、ヴェブレンの全体像はもちろん、彼の経済学を正しく理解するためにも不可欠である。単にそれだけではない。何よりもその整理・検討を行うことが、ヴェブレンの社会科学における独自の貢献を明らかにするためにも不可欠だ。

(b) 事実ヴェブレンは、「制度の変化」——とりわけ資本主義制度の変化——に関する理論の構築を目指していた、確に「制度主義」の経済学者であった。ヴェブレンのその理論構築は、「進化論」の観点はもちろん、彼の「本能概念」と不可分の関係にあった。すなわちヴェブレンは、彼の本能論・本能概念を、制度の変化を分析する際の基本視角・導きの糸としてのみならず、一定の制度を評価する基準としても用いているのだ。「製作本能」という概念がそれである。言うまでもなく、以上のことは、ヴェブレンの資本主義制度（その変化）の分析にも妥当する。

(c) ところで、ヴェブレンの資本主義「制度の変化」に関する分析は、「体制を越えた制度の変化」にまで説き及ぶという内容を有していたのみならず、すぐれて批判的な内容を有していた。そして、このいずれの特徴も、ヴェブレンが、(b)に述べた何よりも彼の本能概念——広くは「本能・習慣論的人間観」や「歴史観」——を背景にして、「制度の変化」を分析しているところから必然的に導き出されたものであった。

(d) また、ヴェブレンのその資本主義制度の分析は、文明・文化の諸領域にまで説き及んでおり、従ってその批判も、一種の文明・文化批判の様相を呈していた。このことは、以上の文脈からしても明らかなように、ヴェブレンの本能概念が「文明・文化批判の視野」と「野心」を秘めていたことを意味する。

要するにヴェブレンをヴェブレンたらしめているのは、彼の本能論・本能概念だ、と言ってよい。

以上、ヴェブレンの「本能論」・「本能概念」とは、決して単に制度の形成を説明するための便宜上の概念といったものではないのである。それは、ヴェブレンが制度を分析する際の導きの糸であるのみならず、何よりも一定の制度を、従ってそれが構成するある社会を、ヴェブレンが評価する際の基準をなすものであるのだ。それをミッチェルもコモنزも否定しているのである。そこで最後にヴェブレンとコモنزやミッチェルとの関係について若干見ておきたい。

エッセルが述べていたように、ヴェブレンの資本主義分析の焦点は、その矛盾にあった。すなわち、産業・機械過程と企業との間の矛盾というものがそれである。この矛盾・対立は、企業支配の体制——資本主義体制——の衰退をやがては導かざるをえないもの、と解されていた。しかもこの帰結は、エッセルが指摘していたように、ヴェブレン思想の二大支柱ともいふべき「進化主義」と「本能論」に由来するものであった。ハリスによると、「ヴェブレンの特徴は、この企業と機械過程から生じる習慣の矛盾が資本主義の没落を引き起こすことを提示したことにある。重要なことは、この特徴が、ヴェブレンの影響を受けたといわれる経済学者のただ一人の研究書の中にも、見い出されないということだ」(A. L. Harris, Types of Institutionalism, in Journal of Political Economy, Vol. XL. Dec., 1832, p. 789)。とすれば、そのヴェブレンを、コモنزやミッチェル等いわゆる「アメリカ制度学派」の人々と一括して取り扱うことは困難だとは言えないか。

また、エッセルによると、「本能論」は、ヴェブレンの思想の中核をなし、彼の思想を統一あるものとなしている、きわめて重要なものであった。特に「製作本能」という概念は、ヴェブレンが経済社会を分析する場合の基本視角をなし、彼が経済社会を評価する場合の一つの基準をなすものであった。しかるに、一般に制度主義者と呼ばれている人々は、その本能概念を思弁的かつ非科学的なものとして、ギャムズによると、「ヴェブレンの最も興味ある心理学的洞察を

無視することによって葬ってしまった」(J. S. Gambs, *Beyond Supply and Demand*, 1946, p. 76) のである。このことは、ヴェブレンの基本的思想を否定したことを意味する。従って中山氏は次のように言うのだ。それ故に、「ヴェブレン、コモンズおよびミッチェルを制度学派として取り扱うことは困難であり、従来のように制度学派として一括することは、ヴェブレンの思想体系の基本的要素を無視することによって制度学派の内容を無意味なものとなすであろう」(中山大『ヴェブレンの思想体系』ミネルバ書房, 1974, 113-114頁) と。